平成23年10月1日発行　第42巻 第10号　毎月1回1日発行　昭和46年1月27日第3種郵便物認可
ISSN 0385-2229

月刊 地域保健

10
2011

●特集

DV問題の解決に向けて

●FRONT RUNNER

本巣市健康増進課 課長補佐 兼 保健指導係長 兼 主査

新村津代子さん

●PEOPLE

特定非営利活動法人全国市町村保健活動協議会 顧問

大坂多恵子さん

FRONT RUNNER

新村津代子さん

本巣市健康増進課 課長補佐 兼 保健指導係長 兼 主査

保健師の役割は、公衆衛生活動。いのちをまもる予防活動です。

専門職が連携してまちを支える

岐阜県本巣市

取材・文　編集部　photographs：Sei Kamiyasu

本巣市は、岐阜県の南西部に位置する約370平方キロメートル、人口約3万5000人のまち。ちょうど〝おしゃもじ〟のような形をしており、2004年に、へらにあたる部分の根尾村、柄の部分にあたる真正町、糸貫町、本巣町の3町1村が合併して発足した。根尾村北部の大半は能郷白山をはじめとする山岳地帯であり、緑豊かで美しい地域である。源氏ボタルや淡墨桜も有名だ。本巣市役所がある本巣駅へは、大垣駅から樽見鉄道で30分ほど。車窓からは、名産の富有柿の柿林やのどかな田園風景など、昔懐かしい「日本のふるさと」を感じさせる眺めが広がる。

市役所の待合室で「お待たせしました」と現れた新村さんは、明るく華やかで、ぱっと花が咲いたような雰囲気。インタビューに添えたヒマワリがぴったりの人だった。

本巣市役所全景

父の育児、介護の姿を見て育った

新村さんは福井県のご出身。お母さんが臨床検査技師で保健所に勤めていたことから、保健師という仕事については早くから知っていた。そのお母さんは看護師、助産師の免許も併せ持ち、当時の女性としてはめずらしいキャリアウーマンで、大変な努力家だそうだ。大正生まれのお父さんは終戦後、捕虜としてシベリアに抑留された経験を持つ。帰国してからの結婚で遅くに授かった子だったため、新村さんをすごくかわいがったという。

「うちの父は、今でいうイクメンでし

樽見鉄道。1両だけのかわいらしいディーゼル車。利用者は結構多く、満員だった

特集

DV問題の解決に向けて

ドメスティックバイオレンス

配偶者や恋人に対する暴力（ドメスティックバイオレンス：DV）は年々増加傾向にあり、警察庁の統計によると、2010年の認知件数は、2001年のDV防止法施行後最多の3万3852件であった。

DVによる暴力は、身体的虐待だけでなく、精神的虐待、性的虐待、経済的虐待などの行為が繰り返し行われ、最悪、自殺や殺人事件にも発展するケースもある。被害者は心身ともに深刻なダメージを受け、健康被害が出現することもある。DV防止法は、こうした暴力が犯罪であることを明確にしたが、デートDVは対象外であるなど不十分な点も多い。また、家族、男女間等の親密な間柄で起こる暴力であることも他者が介入しにくく、援助を難しくしている要因だ。DVの解決には、素早い情報のキャッチと積極的な介入、そして息の長い地域の支援が必要である。

P18 DVへの早期介入と地域における家族支援
保健師としての役割
◎米山奈奈子（秋田大学）

P26 親密な関係での暴力と法律
◎角田由紀子（田中合同法律事務所）

P32 警察としての配偶者間暴力への対応
◎青山彩子（警視庁）

P36 暴力、差別のない社会をめざして
女性ネットSaya-Sayaの取り組み
◎松本和子（NPO法人女性ネットSaya-Saya）

P42 親密な関係性における男性の暴力への対応
加害者リハビリテーションの実践から
◎中村　正（立命館大学）

objet：hiro

ひよこ保健師 season 5

ガールスカウトの延長上に保健師が

母子保健の難しさも実感しつつ日々成長中

山本久美子さん
●山口市健康福祉部健康増進課

◀笑顔を絶やさず、窓口も訪問もしっかりこなしている

◎取材・文・写真
西内義雄
（医療・保健ジャーナリスト）

窓口に近づき「すいませーん」と声をかける。どの役所でも見るありきたりの光景の中に、実は重要なことが隠れていることがある。

すぐに気づいてもらえるか。気づいた人がすぐに窓口まで足を運び、笑顔で応対してくれるか。利用者にとって行政サービスの良しあしを決めるポイントになっているからだ。

今回訪ねた山口市小郡（おごおり）保健福祉センターでは、窓口に近づいていった瞬間から笑顔で迎えてくれる人がいた。その人こそ、今回のひよこさんだった。

名前は山本久美子さん、県内萩市出身の24歳。第一印象から「あ、この人は楽しそうに仕事をしているな」と感じた次第だ。

ガールスカウトとの出合い

山本さんの実家は車修理の自営業を営んでいる。1階が職場で2階が自宅という環境で、油まみれで働く両親の姿を見て育った。その反動なのか、子どものころに憧れたのはお菓子やパン、ケーキ屋さんといった女の子らしいものばかりだった。

「運動は嫌い、音楽が好きという子だったので、ピアノを習い、小学校のころから金管バンドも経験してきました。中学・高校では吹奏楽部に入り、クラリネットを吹いていました。これは今も続けていて、萩市の吹奏楽団に所属して演奏会などもやっています」

ずっと音楽に親しんできた。これだけ聞くと、なぜ保健師を目指したのか糸口が見えなかったのだが、山本さんはもうひとつ、取り組んできたことがある。

「小3から高3までずっとガールスカウトに入っていました。正確には高校卒業後も2年はリーダーの資格を取りながら、スキャップというお手伝い役になり活動していました」

ガールスカウトでの活動は、年齢の違う子どもたち同士の助け合いが多くなる。最初は上の人からそれを教えられ、自分が成長していくごとに後輩たちの面倒もみていく。

「小学校高学年になると下の子たちの世話をすることも増えます。その中で、自分は子どもが好きなんだな、と気づいたのです。そこで、将来は保育士に

▲パン屋さん、ケーキ屋さんに憧れていたころ。左はお兄ちゃん